
鎖で繋がる記憶

曇犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎖で繋がる記憶

【Nコード】

N6535V

【作者名】

曇犬

【あらすじ】

T学と呼ばれる魔法学校に通う少年、霧氷^{むひょう} 飛朱^{あす}。

彼は4年前に少女の心臓をもらい、今まで生きてこれている。だから飛朱は恩返しのため、少女のために一生を捧げると誓った。

自分の意思などいらない、恩人である彼女の意味があればそれで良い。そう決めたのだ。

飛朱の決心、少女の願い、まわりの人々の想い…。
たくさんの想いが交差するファンタジー小説。

ブログにも載せている小説です。

プロローグ

#プロローグ#

君は僕で、僕は君。

二人で一つの華が咲く。

黒と白の花びらをもつ、おかしい華が。

僕が今こうして存在している理由は、君がいてくれたから。
でなければ僕は、とつくの昔に星の一部になっていただろう。

—— 赤の他人だった君が、ある日突然命の恩人になったのだ。

だから僕は、君のためならなんだってするよ。

君が恐れるものなら破壊する。

君が望むものなら必ず手にいれる。

僕が君の人生を貰ったのだから、それくらい当たり前だよな。

僕は自分の心なんて、いらないんだ。

《君が僕の心になってくれるから》

私立トリックTRICK学園。通称”T学”。

ここは”剣士”や”魔術師”などという人間離れした能力を身につけたい者が通う学校で、初等部・中等部・高等部があり、小中高一貫である。

もともと素質がある者しか入学が許可されないため、中等部に上がる時には既に9割以上の者が何らかの能力を持ち、残念ながら能力が身につかなかった者は初等部でT学を辞め、普通の中学校に行くのが一般的だ。

またT学にはいくつかのチームがあり、多くの生徒がチームに入っている。

そしてそのチーム内でパーティーを組み、色々なミッションを成功させるため、行動を共にするのだ。

チームにはそれぞれ1人ずつリーダーが存在するが、リーダーの名前が知られていないチームがある。それが、

「飛朱^{あず}！授業始まんぞー！」

「んー。今行く」

この二人の少年も属している、「BLACK+SKY」だ。

このチームはリーダーの名前が伏せられているにも関わらず、T学で人気なチームの一つだ。

「BLACK+SKY」の特徴としては仲間意識が高く、”前へ進め、背中は預けよ”が旗印である。

「ユギ。次の授業で何？」

「あー…確か剣術だよ」

「良かったな、唯一お前ができる授業じゃん。うん、唯一」「唯一」って2回も言うな！てか俺剣士だし出来ないとマズイから！」

漫才のような会話をしている2人の少年、”霧氷飛朱”^{むひょう}と”風山”^{かざやま} ユギ”は丁学高等部1年の生徒である。

幼なじみである飛朱とユギは昔からの付き合いのため、お互い遠慮もなく一緒にいる分には楽な相手だと思っている。

遠慮がなさすぎて、飛朱が酷い事をズバリと言う事も多々あるが。

「そっぴや飛朱。召喚魔法は上達したのか？特訓始めたんだろ？」

「僕に召喚魔法は向いてないみたいだよ。小さい猫モドキくらいしか召喚できなかった」

飛朱の若干ハネた黒髪の上にいる猫のような生物が、全てを物語っていた。

ユギはそれを見て吹き出し、飛朱の赤い瞳が鋭く細まる。まるで黒豹のようだ。

「しかもこの猫モドキ、召喚しっぱなしで戻らないんだけど」

「はあ！？どうすんだよ！」

「放置」

「…そうっすか」

猫モドキの頭を撫でながら、ユギはケラケラ笑う。

「それにしてもなんで召喚魔法を始めたんだ？」

一瞬、飛朱の行動が止まったがすぐに口を開いた。

「未^{ミユ}夢”が、望んだから」

——未夢。

もうこの世にはいない、飛朱と同じ赤目の少女。

四年前の入学式の日、突然彼女は逝ってしまった。無くなっ
てしまった。

未来も、希望も、夢も、……全て。

残ったのは悔いだけ。

死んでも死に切れない、とはこういう事だ。

だから彼女は”完璧には死ねなかった”。

形は無くなったが、記憶と意思だけが残ったのだ。

未夢に助けられた、飛朱の心に……——

「まだ、未夢ちゃんの事引きずってんの？」

ユギは無理矢理な笑顔を作る。

幼なじみの飛朱はそれに気づくが、あえて何も言わず顔を逸らした。

「引きずってるわけじゃない。ただの恩返しだ。心臓をくれた人への」

飛朱の中にある脈打つ心臓は、元は彼女のものだった。

そして今でも、未夢のものであると少年は思っている。四年前からずっと。

「もうその心臓は飛朱のだろ？ 4年もお前は未夢ちゃんのためにやってきたじゃんか！ だから……」

「僕はまだ、未夢を”殺した”奴に復讐が出来ていない」

少女は病気や事故ではなく……事件に巻き込まれたのだ。

その証拠は”記憶”である。

死んだ彼女の記憶が何故分かるかという点、単純に転移したからだ。

言うまでもないだろう。転移された人というのは未夢の心臓を移植された少年……飛朱である。

以来、彼女の記憶のカケラが飛朱に宿り、何かを見た拍子に突然、走馬灯のように未夢の記憶が駆け巡るのだ。

「ほんと、未夢が犯人を見ててくれてたら良かったのに。そしたら

こんな苦労しないで復讐できたよ」

飛朱は溜息混じりに呟く。それに合わせるように、頭の上の猫モドキが「ネウー」と鳴いた。未夢は犯人を見ていない。見たのは魔法を使った際に出る光だけだ。

そのため何らかの魔法を使われたということしか、記憶にない。

だが、不可解な点がある。

未夢は意識不明の重体で発見されているが、傷は1つも無かった。四年の歳月が経った今でも、傷をつけずに重体にする魔法など見つかっていない。

「無傷だったんだよな…ほんとにそんな魔法あんのかなぁ？」

「知らないけど、あの光は絶対に魔法の光だ」

ユギはふむ、と頷き眉をよせる。

そんな彼をからかうように、猫モドキはユギの頭の上に飛び移った。

「お前っ…、何すんだよ。俺の素敵なツンツン髪を乱すな！」

「もつとやれ」

「虐め！？飛朱虐め！？…てかこの猫モドキ、名前あんの？」

キョトンとした表情の飼い主に、ユギは呆れたように「オイ」とツツこむ。

その猫モドキは飛朱が召喚しただけあり、青と黒の中間色のような毛だ。瞳も赤である。

「飛朱そつくりだなあ…」

「はあ？どこが？目濁ってんじゃないの、スーパーに並んでる魚み
たいに」

「例え変えてくれ」

えー、と不愉快そうな飛朱に、ユギは泣きたい気持ちに襲われる。
だが泣くわけにもいかなかったため、逃げるように話を変えた。

「この猫に名前つけようよ」

「…。なんて？」

しばらく口を尖らせ考えていたユギは、ぱあっと顔を輝かせた。

「太郎！」

「却下」

早すぎる却下だった。

どうやら猫モドキも気に入らなかったらしく、ユギの頭に爪を突き
立てる。

その痛みに耐えながら、ようやく真剣に考えだすユギ。

そしてさつきと同じく顔を明るくし、「あ」と閃いた。

「…”ギミア”！俺、未夢、飛朱の名前から字とっただけだけど。
良くね？俺天才じゃね！？」

まるで3人の結晶のような名前。

ギミアと呼ばれた猫モドキは、今度こそ嬉しそうに鳴いた。

* * *

『あーくん、召喚魔法できたね。すごいなあ』

『ただの猫モドキだよ。全然だ』

銀髪でショートのをした少女が、天使のように微笑んだ。
クルクルとしたその髪が、やんわりとした印象を一層ひきたたす。

二人のいる部屋はモノクロで、窓もドアもない。
不思議な空気だけが漂っている。

『ギミア「ちゃん」？ギミア「くん」？…可愛いじゃない。とって
も』

その言葉に、少女と真逆の髪色をした飛朱は「性別はないけど…
まあ。」と若干流され気味だ。

『私も触りたいな。ふわふわだろうちに』

触り心地を想像したのか、目を細め両手を合わせた。十六歳の少女が小さな子供のように見える。

『夢の世界に召喚魔連れて来れるか分かんないけど、努力する…』

飛朱は黒い椅子から立ち上がり、少女の頭を撫でた。
彼女は『嬉しいな』と、ふふつと笑う。

しかし、少し悲しそうなその瞳に飛朱は気がつかなかった。

『…じゃあそろそろ朝だから、またな。”未夢”』

『うん、またね。学校に遅刻しないようにするんだよ?』

未夢の水色のカチュームをつけた頭から手を離すと、飛朱は純白に輝く光に包まれ、一瞬にして消えた。

それを目で見送り、不思議な部屋では未夢だけが残る。

そして、ひとこと呟いた。

——『ごめんね』。

* * *

「ミウーっ」

朝。ギミアは主人を起こすのに必死だった。

一生懸命鳴いたり、ベッドを引っかいたり、挙げ句の果てに布団の中で暴れだしたり…。

しかし目覚めの悪い主人だ。そう簡単には起きない。

「……ギミア五月蠅い」

それでも努力の甲斐はあり、一応目は覚めたらしい飛朱。
不機嫌オーラ全開だが、そんなことは構わずギミアは飛びつく。

「ミウっ!!」

飛朱は怠そうにギミアを撫でてから、首の後ろを掴み床へ降ろした。

ギミアは満足そうに擦り寄る。

「今度はお前も未夢に会おうな」

主人の言葉に寝ぼけてんの? とばかりにギミアは首を傾げたが、飛朱は無視しT学の着替え始めた。

——この部屋は、T学の寮である。

それぞれに個室が与えられ、不自由な決まり事もない。

登校時間までに学園に着けば、友人の寮に泊まっても良いし、夜遅くにコンビニに行くのも自由だ。

「ミウ?」

飛朱がネクタイを締めたところで、だんだんと大きくなる足音が聞こえる。

ギミアは不思議そうだが、少年は特に気にした様子もなく朝の準備を続けた。

数秒後、ガチャリとドアが開く。

「聞いてくれよ! 誰かが俺のお菓子食いやがったんだ!!」

「へえー」

「しかも世界で1番大好きなブドウ味”ぷっちゅ”！！…はあ、鍵
閉めとけばよかった畜生…」

「それは大変だったね、…はいもう僕に用ないでしょ？出てけ」

「泣くぞ。毎朝迎えにきてやってるのに」

学園の寮に入ってからというもの、毎朝ユギが迎えにきている。
といっても部屋が隣同士なため2秒でつくが、それが2人の日課に
なっていた。

飛朱は怪訝そうな目つきで幼なじみを数秒睨んだ後、諦めたよう
に目を伏せる。

「——じゃあ十三分三十三秒待つて」

この中途半端な時間が終わると、二人の慌ただしい朝が始まる。

ある者は大切な人のため。

ある者は自分のため。

己の能力をひたすら伸ばす。

丁学登校時間までは、あと20分——…

「…やっと来たか、遅刻魔野郎共」

涼やかな朝にも関わらず、汗をだらだらとかき教室に入ってきた2人の少年。

その姿は全力疾走で学校に来たのだと、物語っていた。

「先生！飛朱が準備遅くて遅れたんすよ！だからオレの遅刻は免除つてことに…」

「しねえよ」

担任はユギの訴えを切り捨て、メモにチェックを記入する。
そのメモは二人の遅刻履歴でいっぱいだった。

「おいてめえら。まだ5月なのは知ってるよなあ？なのになんで遅刻が10回以上あるんだよ、ああ？」

この担任はT学の”三大教師”の1人で、学園1柄が悪い。そのため生徒からは”鬼先”と呼ばれている。

しかし、彼の剣の腕は確かなもので、尊敬する生徒も少なくない。
ユギもその1人だ。

剣士の1人として彼を慕い、憧れ、目標としてひたすら追いかける。
いつ彼を越せるのか、その前に越せる日が来るのかすら分からないまま、ただただ剣と自分を1つにしていく。

莫大な決心がなければ、ここまではできないだろう。

「…遅刻の原因の大半は、飛朱が起きるの遅いからだ！」

ブレザーを脱ぎ何事もなかったように席についている飛朱を指差し、ユギは反発をした。

鬼先を相手に反発するのは学園でただ1人、ユギだけだ。

飛朱はふうつと息を吐き、ルビーのように赤いその瞳をユギに向けた。

その目力に圧倒され、ユギの身体が引きつる。

「な、なんだよ飛朱くん。ぎゃぎゃ逆ギレはいけませーんよう…？」

ユギは変な構えをして三步下がった。

飛朱が怒ると怖い事は、幼なじみが1番知っている。

滅多にキレることがない人ほど、恐ろしいものだ。

「…ごめん、俺のせいだな」

刹那。教室が、世界が、ユギが、凍りついた。

冷血毒舌少年、霧氷飛朱が謝罪をするなど宝くじを当てるよりも珍しい事だろう。

予想外の状況に、ユギは呼吸すら忘れていたようだ、

「僕が起きるの遅いから、遅刻にさせちゃったんだろ？」

「い、いや、遅刻くらい別にいんだ。悪い、オレが言い過ぎたよ。こつというのは連帯責任ってやつだ！」

「本当に？……じゃあ、僕のせいじゃないね」

「おうよ！——て、え、今なんて？なんかおかしくね！？」

飛朱がクスッと笑う。

その顔立ちの良い顔は、まさに小悪魔。

”ハメられた。”

そうユギは確信したが、既に時遅し。

「ほんと騙されやすいよね」

いつか詐欺られるよ？と言いたげな飛朱の視線に、ユギは「うるせー」と目で言い返す。

彼らのアイコンタクトは、言葉よりも伝わり合えるほど正確かつ迅速だ。

「その糞ガキ、授業5分過ぎてんだぞ？あ？…さっさと席つけド阿呆！！」

腕を組み、鋭い目つきで睨む鬼先。

ユギは文句の言おうと口を開くが、担任の圧倒的な存在感に唇を結んだ。

飛朱はつまらなそうに頬杖をつき、かばんの中から出ているギミアの頭を撫でる。

「…じゃあ、授業始めんぞ。12ページ開け——…」

チヨークの音。

爽やかな風。

太陽の光。

それらは子守唄のように飛朱の眠気を誘い、あっという間に夢の世界へと案内をする。

白く儂い夢路へ――。

あの人が深く眠り、夢の世界へ舞い降りた時。

それは私があの人と唯一お話ができる時間。

私のいる黒と白の小さな世界は、あの子の夢の世界。

私は夢の…ただ一人の住人――。

* * * *

突然、一人の来訪者が訪れた。

『あーくんっ！？なんでいるの？』

『僕が此処にいるってことは、現実の世界の僕が爆睡してるからじゃない？』

再び白と黒の世界へやってきた飛朱。

理由はただ1つ。現実の世界にいる飛朱が寝ているから。

そんなことは質問した本人だって百も承知だ。

問題はそこではない。

問題は、今の時間は授業中のはずだということである。

『授業中寝ちゃメッ』

飛朱の前の椅子に座った銀髪の少女が、子供を相手にしたように怒る。

しかし色白で華奢な、いかにも力の弱そうな女の子に怒られたところでまったく威力も効果もない。

『まあ気にしないでよ。未夢』

”未夢”。

つい1時間前の別れぎわの際と同じく、確かに飛朱は彼女をそう呼んだ。

現在、飛朱を生かしている心臓の元の持ち主——未夢。

彼女は確かに四年前、十二歳という若さで死んだ。

それはどう否定しようと変えられぬ、事実。

なのに何故、飛朱の前にいる未夢と呼ばれる少女は、普通の人間のようにしなやかに動き、普通の人間と同じく数えきれないほどの表情があるのか。

まるで生きているかのようにだ。

『そんなことより、何かやりたいことある？』

未夢の肩がビクツと跳ねた。

唇も固く結び、絞りだすように重い口を開く。

『…ねえ、あーくん』

『なに？』

スツと音もなく椅子から立ち上がり、ふんわりとしたワンピースがなびいた。

光を放ちそうな白色と淡い水色をしたそのワンピースは、白い肌を
いつそう引き立たせている。

『私は…もう生きてないんだよ?』

突然の残酷なその言葉は、少年の目つきを一瞬にして変えた。
太陽を隠す黒い雨雲のように、赤い瞳が闇に覆われる。

まさしく、拒絶。それは気づかないふりをして目を背け、あつた
事をなかったと洗脳する。

『だからもう…』

『未夢』

語尾につれ細くなるソプラノ声を、完全断ち切る少年の少し低い
声。

最後まで聞かなくとも、彼女が何を言いたいのかがわかったのだ
ろうか。

それとも単に続きを聞きたくなかっただけなのか。
きつと、どっちも当て嵌まるだろうと未夢は悟った。

『未夢の望みは僕の望み。だから叶える、それは僕の意志。負い目
なんて感じなくていい』

拒絶している飛朱の表情はあまりにも悲しそうだったため、未夢
はそれ以上言い返せなかった。

飛朱が未夢を何よりも大切だと思うように、彼女もまた同等くら

いの気持ちを抱いていて、傷つく彼の顔を見たくなかったのだ。

『…あ、現実世界で誰かが呼んでるみたいだから、僕はもう帰るよ』

『う、うん。お勉強がんばってね』

授業中だったのを忘れていた未夢はハツとして見送る。

いつものように笑ってみせようとするが、複雑な感情に頭を支配されていた未夢は、人形のような形だけの笑顔になってしまった。

飛朱が光に包まれ消えた後も、心の中はモヤモヤとした霧が充満している。

現実の世界へ帰って行つた飛朱は今頃、怖い先生に説教をされている事だろう。

『……はあ』

1人になった未夢が小さくため息を吐いた。

いつもならここで「幸せが逃げちゃうよ」と思い息を大きく吸うのだが、そんな余裕が今はなかった。

『私ではなく、自分の心を持つてつて言わなくちゃいけないのに。傷つけたとしても、ハッキリと言わなきゃいけないのに。…いつまで私はあーくんを縛りつけているの…』

冗談で召喚魔法をやってみたいと言えば、私の代わりにすぐにでも魔法を特訓をし始める少年。

初めて会った時、心臓をくれたからこれから永遠に私の意志を自

分の意志とすると聞いた少年。どこまでも一途で優しい少年。
そんな彼を、いい加減解放してあげなきゃ。

でもどうやって？

言い聞かせようとしても、今日のように遮られてしまっただろう。
そもそも、何が良くて私は”完璧”に死んでないのかな？
いつそ最初から、生まれなきゃよかったのかな…？

『意識なんて、身体といっしょに死ねば良かったのにね』

どうしようもない怒りと切なさが留まらなくなり、冷たい雫とな
ってポロポロと溢れ出す。

けれど彼女は涙が嫌いだった。
涙は弱い証拠だと思っているからだ。

「その心臓はもう、君のものだよ」

それだけを心中で叫びながら、少女はギュッと目をとじた。

意地でも涙を零さぬように――。

* * * *

午後五時三十分、放課後。

飛朱とユギはT学の広すぎる敷地を歩いていた。

飛朱の腕の中では、ギミアが幸せそうにくつろいでいる。

「…珍しく大人しいじゃん飛朱」

一時限目が終わったあたりから、飛朱の様子がおかしい事にユギは気づいていた。

生まれた時からいっしょに成長してきた幼なじみは、少しの異変も見逃さない。

「ユギは相変わらずうるさいね。口もぎ取りたくなる」

「大人しくても毒舌は変わらないんだなっ！」

そんなやりとりをしていると、二人の少女とすれ違った。

名前も知らなければ顔も知らない少女達だったが、リボンの色からして1年生だろう。

彼女達はうつとりした表情で、何やらテンションが上がっている様子だ。

『ねえ！また「BLACK+SKY」がレベルの高いミッションクリアしたらしいじゃない！このチームかつこいいよねえ…』

『やっぱすごいなあー。あたしも「BLACK+SKY」入りたい

！けど人気すぎて倍率かなり高いし、実力ないと駄目だし…。絶対入れないよー」

『もっと強かったらなあー』

ユギは頷きながら少女達の話に聞きいていたが、飛朱に足を踏み付けられ我に返る。

お返しに自分より七センチほど小さい飛朱を見下してやろうとするが、飛朱の冷酷な瞳には勝てなかった。

「あの…痛かったです飛朱さん」

見下すどころか敬語になっているユギに返ってきた言葉は、あまりにも率直で素直なものだった。

「お前のそのドヤ顔がうざくてつい」

「ネウーッウ」

ギミアが蔑むように笑っている。
少なくともユギにはそう見えた。

「だ だってよー、『BLACK+SKY』の者としては嬉しいじゃないか！」

そう言っつて、自分の腰に構えている長い剣を鞘ごしに誇らしげに撫でる。

ユギにとってその剣は、命と同じくらい大切な物だ。

「黙れ剣オタク。…こんな奴置いてさっさと行こうかギミア」

「ちょ、待つ…、確にかっけー剣好きだけどねっ！？断じてオタクではないぞ！！」

自分なりの主張をしている幼なじみの声など聞こえないふりをし、スタスタと前を歩いて行く。

来るな、触るな、近寄るな。と、身体全体で現しているように。

鬼ごっこ状態になっているうちに、黒と青が基調の城のような建物が、だんだんと大きく見えてきた。

いずれ視界は黒と青でいっぱいになり、城のてっぺんを見上げるのは一苦勞になった。

この建物はT学で一位・二位を争う強大チーム。――「BLACK + SKY」の集会場だ。

見張りこそいないものの、高そうな扉が堂々と構えている。

T学には授業が終わった後は自分の属するチームの集会場に行く規則があり、そこでパーティーとミッションの打ち合わせや技の特訓をするのだ。

「てかさあ、飛朱。今何時？」

飛朱はめんどくさそうに携帯を開く。

「五時三十五分」

「遅刻じゃねえか！」

「BLACK + SKY」の集合時間は四時三十分。

授業は四時で終わるため普通ならそれなりに時間に余裕がある。だが、二人はしばらく教室で話していた。結果、遅刻となってしまうのだ。

「遅刻なんていつものことだよ」

「怒られるのもいつものこと。」

言葉の裏の意味まで分かってしまったユギは、諦めて笑った。

「…ですよーっ」

マイペースすぎる少年達は穏やかな雰囲気にも包まれる。

ユギがいつもの明るい調子で扉のノブに手をかけた。

集会場の扉を開けた瞬間、彼等の和やかな雰囲気は花びらのように散り去ってしまうとは知らずに。

「遅いつ！一時間オーバーしてるわよ！」

入った瞬間、少女の怒声が二人を歓迎した。

飛朱は嫌な物を見たかのように彼女から視線を反らし、ユギは頬を人差し指で掻きだす。

「…だいたいあんた達、学校も遅刻したらしいじゃない？」

怒声を浴びせた声の主は、紫苑色の瞳で蛇のように彼等を睨みつけ、堂々と仁王立ちをしている。

他のメンバーは各パーティーごとに打ち合わせを始めていた。

「えー、毎回のごとく御迷惑をおかけしまして、すんませーん」

軽い謝罪のユギの言葉に、少女の怒りパロメーターが最大値になる。

直感でそれに気づいた飛朱は、小さく溜め息を吐いた。

「…ユギっ!」

「は、ハイ!」

圧倒されたユギは、反射的に背筋を伸ばし返事をする。

彼女は腰までである山吹色の長い髪を翻し、ユギの元へ駆け寄る。
そして思いっきり頬をつねった。

「いっただあぁ!」

「ふんっ、自分の行いを悔やみなさい。同じパーティーのあたし達は待ちくたびれてんのよ」

頬を摩る幼なじみを横目に、自分に被害がなかった事に密かに安堵する飛朱。

「怒ると可愛い顔が勿体ないぞ、”ネコちゃん”」

「ふん、大きなお世話よ。てかあたしの名前は”ネコちゃん”じゃない、”野原^{のほし}音呼^{おんこ}”よ。馬鹿ユギは音読みしかできないのかしら?」

「相変わらずツンツ…」音呼、遅刻した僕が言うのもアレかもしれないけど、打ち合わせ始めないの？」

二人が言い争いだすと当分止まらなないと判断した飛朱は、ユギの口を抑え話に割り込む。

「そ　そうね。他の2人も待ってるし…打ち合わせ始めるわよ」

同じパーティーのメンバーが2人、椅子に座って待っている。

その2人の元へ、彼等は早々と歩きだした――。

「飛朱ぽん、ユギっち、やっと来たんだねえ」

「あ、こんにちはー」

柔らかに微笑む少女と、チョコレートを美味しそうに頬張っている少年が、飛朱達を待っていた。

少女——”海^{うみ} 蝶結^{りぼん}”は桜色の眼と、同じく桜色の髪をポニーテールにしている。

彼女は友達や家族を大切に作る心優しい性格の持ち主だが、おっとりとした面も持ち合わせた高校生1年生である。

しかしネーミングセンスを始め、何かとセンスがないのが欠点だ。

「そういえば。りっすー、チョコ食べすぎだよお」

蝶結にりっすーと呼ばれた少年、”雲川^{くもがわ} 裏助^{りすけ}”はハツとしたように目を丸くする。

「うごごめん海ちゃん!」

申し訳なさそうな表情を浮かべる裏助に、ユギは『謝るところか?』と首を傾げたが気づいた者は誰もいない。

「つい美味しくって…」

裏助は極度のチョコ好きだが、蝶結に言われるがままにチョコレ

ートを制服のポケットへしまった。

残惜しそうにエメラルド色の瞳がポケットを見つめているが、音呼達はあえて何も言わなかった。

話を変えるため、ユギは飛朱に話を振ろうと口を開く。

「ああそういえば飛朱……ってオイ！寝るなっ！」

飛朱はテーブルに顔を伏せ、ギミアと寝る体制に入っている。既にうつらうつらとしており、今にも寝息が聞こえてきそうだ。

その姿を見た音呼の口元が引きつる。

「あんたってホントいつでも、何処でも、どんな状況でも寝られるのね……。ええ、お陰で何度サボられたか覚えてないわ」

音呼はそう言っ、自分の手の平に意識を集中し《光魔》^{リリル}と呼ばれる魔法の源である光を発生させる。

瞬く間に光は銀色に輝くフルートに変化し、その手に現れた。

ユギの血の気が引く。

「今日という今日はサボったら許さないわよ飛朱！覚悟しなさい！」

「だあああっ！やめろネコちゃん！音楽魔法使うなあああ！」

「黙らっしやい！ユギもフルートの音で頭力チ割りたいのかしら！？…むしろ先に殺ってやるわ」

ぎゃあぎゃああと騒がしい声が響き渡る。

魔法の際に出る《光魔》の純白の光が集会場を激しく照らす、蝶結達を始め「BLACK+SKY」のメンバーは動揺し止めるどころか「音呼ちゃんやっちゃえ!」「お前ら毎日毎日飽きないなあ」などと呟き面白がっていた。

「飛朱!俺殺されちまうから早く起きろ!」

耳を塞ぎながら音呼から逃げ、幼なじみにすがるが現実残酷だ。睡魔に襲われている飛朱の機嫌はかなり悪く、濁った瞳でゆらりと起き上がった。

「…。邪魔、しないでくれる?」

半分寝ぼけた飛朱のその発言を聞き、ユギは無意識に腰の剣に手をかけていた。

【キケンダ】

きつと身体が命のそう察知したのだろう。

音呼も瞬きひとつせず、ジッと仲間である飛朱を警戒していた。

しかし、何者かの制止の声が飛朱の目を覚まさせ、乱闘が起こることはなかった。

「やめろ、やんちゃな1年共」

螺旋階段から刺々しい声が雷のように落ちてきた。

制服は着崩れ、一見チャラそうな3年男子高校生が降りてくる。声の主の左胸には夜空を模したバッジが飾られていた。

「奏先輩」――

かなで
奏は騒がしい飛朱達のパーティーに、3年前から手をやいている。

「お前らここ壊す気か。つたく、中一の頃から何回お前達に傷つけられてきたと思ってんだよ…」

「あー…二桁いつてるわね」

「二桁で済まないからな音呼。毎回」「BLACK+SKY」代理リーダー”である俺が学校に謝罪してんの知ってんだろ！」

奏の左胸には、夜空を模したデザインのバッジが光っている。

これが、リーダーの証だ。

これを付けている者は、たとえ代理だろうと、リーダー同等の権力があり権限がある。

「奏先輩。いつも大変ですね」

「おい飛朱1回殴らせろ。誰のせいだと思ってんだよ」

三年前の春に創設された「BLACK+SKY」の本物のリーダーは、今だ発表されていない。

通常、チームの創設届けをT学に提出した者がリーダーになるが、誰が提出したのかも謎に包まれている。

答を知っている者はT学の教師のほんの一握りだ。

「ユギ達にももう中等部の後輩がいるんだから、先輩らしく頑張れよ。お願いだから俺の仕事を増やすな…っ」

チームの各パーティーにミッションを与えるのはリーダーだ。
パーティーの能力などから判断し選び与えるというのは一苦勞で、
代理といえどもリーダーは忙しい。
特に所属人数の多い「BLACK+SKY」は尚更だ。

頭を抱える奏に、蝶結がかけよる。

そして彼女は奏の背中をポムポムと叩き慰めた。
マスコットキャラのような可愛らしさに気持ちたちが静まり、奏はい
つも蝶結に救われている。

しかし逆に苛立つてる者も存在した。

「…ちよつと」

そんな奏と蝶結の光景を見ていた音呼が、不機嫌な口調で声をか
けた。

大魔王のような目つきで、奏を睨みつけている。

その殺気に満ち溢れている音呼の瞳は、輕蔑の色も混じっていた。

「なんだよ」

「あたし、兄がロリコンなんて許せないわ。」かな兄」

「ロリ…！？兄貴に向かって何言うんだよ！」

「BLACK+SKY」代理リーダーは、血の繋がった音呼の兄。
”野原 奏”。

顔のパーツは男女の差もあり、それほど似ていないが紫苑色の瞳

は鏡に映したようにそっくりだ。

また、髪の色素は奏の方が薄い、つやつやとした髪質も似ている。

「このロリコン！かな兄なんて滅ばいいわ」

「ロリコンじゃねえよ！」

「どうせ下心があるんでしょ！馬鹿兄貴！」

炎上する兄妹喧嘩。

天然な蝶結は自分がそもその発端であるとも知らずに、裏助と楽しそうに話した。二人はのほほんと語り、周りに花が飛んでいる幻影がユギには見えた。

「…って、かな兄！あたし構ってる暇ないのよ。3日前にかな兄からミッション貰ったし、話し合いしなきゃ」

「俺もこれから代表会議だから、妹と遊んでる暇ねえよ。じゃ、またな。…サボるなよ」

最後は兄らしく念を押し、妹の頭を撫でる。

『当たり前よ』と返事を返した音呼は、ダラダラとしていた飛朱とユギを叩き起こし、蝶結、裏助を呼んだ。

そのまま丸テーブルを囲むように座らせる。

野原家はリーダーシップの血が濃いのかもしれない。

「なあなあネコちゃん！今回のミッションはなんだって奏先輩に言われたんだ？」

ユギに急かされ、音呼はある書類をテーブルに広げる。

『デスセカイ』と書かれた書類だった。

「今回のミッションは、」「デスセカイ」を追撃せよ”。デスセカイについてはこの書類に書かれている通りよ」

裏助がクリクリとした丸い眼を書類に向け、音読を始める。

「デスセカイ、とは。最近魔法を使って人々を脅し、金を奪っている集団。弱い魔法しか使えないが人数が大規模。――…怖いねえ」

しょぼん、とする裏助に「怖がんの早えよ」と軽く頬をつねるユギ。

飛朱は動じずに書類を眺めながら、音呼に尋ねた。

「このミッション、いつやるの？」

「明日よ。だから学校は行かなくてオーケー」

「ふーん…、まさかとは思うけど、泊まりなわけないよな？」

疑問をする飛朱に、ユギは「まさかあ」と笑いながらオバさんのように手を振る。

明日出発なのに泊まりなわけがない。
きつと日帰りだろう。

――そう思っていた。

「え、泊まりよ？三日前くらいに次のミッション泊まりだからね、
って言わなかったっけ？」

この言葉が返ってくるまでは。

* * *

「くそー！1日で、しかもこんな夕方から、泊まりの準備するなんて無理だっ」

Ｔ学の男子寮では、ユギの叫び声がこだましていた。
音呼から衝撃の告白を聞いてから早々と寮に戻ったユギだが、思いの外準備は難渋だ。

「さっきからうるさいよユギ」

隣の部屋で暮らす飛朱が、不機嫌な顔をして部屋に入ってきた。
傍らには逆毛をたてキシヤーっと威嚇をするギミアもいる。

「おお飛朱。お前はあと準備どんくらい？」

「終わった」

「はへ？」

顔色1つ変えず答えた飛朱に、間抜けな声が漏れた。
頭で言葉を反復させ、ユギはやっと理解する。

「ぬぁにー！？おま、早くね！？手伝えよ」

ユギがやかましい音量で話すため、煩そうに右手で耳を塞ぐ飛朱。
そして余った左手の上に、ビー玉くらいの大きさと形をした物を

出現させた。

その球の周りには、魔法の際に出る”光魔”が光り輝いていた。

”星のカケラ今流れよ”…」

その詞を飛朱が紡いだ刹那、その球がシュッとユギの額へ飛んだ。鈍い音が響く。

「いでっ…、お前魔法使ってんじゃねえよっ」

「煩いんだもん君。まあ大丈夫だよ、かなり手加減したし、球は1つしか出してないから…痛くないでしょ？」

「いてえよっ！…てか準備終わんね」

ユギは額を押さえながら、準備を再開させた。

いつもならやり返そうとするが、今はそんな暇などない。

飛朱はユギの机の椅子に腰をかけ、部屋を眺めた。

隅から隅まで物、物、物…。

お世辞にも綺麗とはいえない散らかりようだ。

「ねえユギ、毎回思っけど…何この汚い部屋」

散乱する服や小物を指差すと、ユギは苦笑いをして目を逸らした。

ギミアは普段、綺麗で清潔な飛朱の部屋で生活をしているため、汚い部屋が信じられないようだ。

「いやあオレ掃除嫌いで…」

「きつたないな」

「ゴメンナサイ」

「…はあ」

椅子から降りた飛朱は、何故かユギに手を差し延べた。

「なにこの手。…あ、もしかして、手伝ってくれんのか…??」

「うん」

珍しく優しく笑う幼なじみに、ユギの心で感動の涙が溢れる。
差し出された暖かい手を握った。

しかしユギの考えは甘かった。
手が暖かい人ほど、心は冷たいのだ。

「千円で、ね。今の握手で契約成立したから、一方的な解除は認めない」

これは一種の詐欺だろう。

悪知恵の冴える幼なじみもち、ユギも苦労が多い。

「!?や、やられた…。まあ、でも真面目に準備終わらなそうだったし、頼むわ」

「準備の前に、この部屋をまず片付けなよ。こんな汚いんじゃ物は

見つからない、イコール準備も進まない」

「でもそんな時間無…」

そこまで言つて、ユギは閃いた。

飛朱は極度の綺麗好き。いつでも部屋が綺麗だ。
片付けるのも慣れている。——早い。

「ナイス飛朱！お前めっちゃ片付け早いから余裕だな！千円なんて安いもんだぜ」

こうして、準備の前に部屋掃除が始まった。

それなりに広い部屋は時間が経つごとに、歩ける面積を広げる。

三十分弱であつという間に部屋は元の姿を取り戻した。

お陰でどこに何があるのか解る。

「うおお、こんな綺麗なのいつぶりだ？探してた歯磨きセットもあったし、準備もはかどりそうだぜ」

「うん。…じゃ、謝礼金貰つてくから」

ユギのズボンに入っていた財布を抜き取り、1枚奪い取る。
どさくさ紛れて2枚ほど取ろうとしたが、幼なじみに免じやめた。
我ながら偉いな、と飛朱は密かに思う。

「だいたい、ネコちゃんがもっと早く言ってくれないからいけない」

だよー。ちくしょ…」

「音呼は変なところ抜けてんから仕方ないよ。それに」

” そんな怒ってないくせに。”

そう言うと、みるみるユギの顔がタコのように赤くなる。

飛朱は涼しい顔でギミアを撫でた。

「あ、飛朱…お前まさか知って…」

おどおどする少年にクスッと笑いかけ、ドアへ向かった。

無言で廊下に出てから振り向き、やっと飛朱の唇が小さく動く。

「さあ？ユギの好きな方なんて知らないよ？」

穴があつたら入りたい。まさにその言葉がぴったりだ。

「飛朱の……バツカヤロオオオ！！！」

ユギの遠吠えが丁学を駆け巡った。

* * *

ガタンゴトン、ガタンゴトン。

五人組の高校生と猫もどきが、始発の列車に二時間以上揺れていた。

「はあ……」

「ちょっとユギ。不幸バラまいてんじゃないわよ」

溜め息を吐いた少年に、音呼の喝が飛ぶ。

なんとなく目を合わせられずに、平謝りをすれば「まあ今日は許すわ」と冷たく返された。

昨晚、幼なじみに自分の恋情がバレていると知り、今だに羞恥で顔がほてる。

音呼を前にするだけで思い出し、内心悶えていた。

「ユギっち、なんか顔赤いよ？どうしたの？風邪？」

「大丈夫。なんでもないよ海ちゃん……」

蝶結は不思議そうに睫毛をしばたたかせる。

「それならいいけど……」

自分の隣ですやすやと眠る飛朱を、殴って記憶喪失にさせたいと思いつつ、自分の情けなさに落胆するユギ。

青春とは時に辛いものだ。

「…あ、みんな！次の駅で”デスセカイ”の本拠地がある「スキマ町」に着くよ」

裏助の声に飛朱の瞼が開き、赤い瞳が世界をとらえる。ギミアも主人と同じ時に起き、ぐつと背中を伸ばした。

時刻は八時三十分。

窓側に座っていた飛朱がカーテンと窓を開けると外は明るく、暖かい風がふわりと舞い上がる。

その風を気持ちよさそうに浴びながら、まるで外に話しかけるように、わずかに唇が動かしした。

「――未夢」

飛朱の小さい呟きは、風音にほぼ掻き消される。隣にいたユギでさえ、ほんのかすかに声が届いたくらいだ。

「んあ？飛朱なんか言った？」

「別に」

彼女と最後に夢で会ったのは、いつだっだろうか。微妙な空気のまま別れて以来、あの白い姿を見ていない。眠りが浅いのか？

飛朱がいろいろと考えている間に列車は止まり、スキマ町に着く。ミッシオン中に考え込むのは危険だと感じ、脳を無理矢理切り替えた。

「あー私物が重い…。早く宿に荷物を置きにいきましょう。全てはそれからよ」

「そうだねえ、僕も手もげちゃうよー。ふええ」

「裏助、あんたは男なんだから頑張りなさい」

音呼に怒られ、半泣き状態の裏助。

彼女は幼い頃からこんな性格のため、昔から男に喧嘩で負けたことはなかった。

「可愛い」より「かつこいい」と言われた方が断然多い。

「で。音にゃんちゃん、海達が泊まる宿は何処なの？」

ピンクのポニーテールを揺らし、蝶結が音呼に尋ねる。

「音にゃんちゃん」とは、蝶結が命名したあだ名だ。

「駅から歩いて三分だから見えるはず…——ああ、あそこよ。あの金色の屋根のやつ。学校がそれなりに豪華な宿を用意してくれたわ。まあこれも全て「BLACK+SKY」の活躍のお陰ね」

チームのミッシオンでかかる交通費や宿泊代は、全額丁学が支払っている。

しかしそのお金はチームの人数や活躍によって異なり、学校が用意する宿の豪華さもチームによってバラバラだ。

人気が高く、難解なミSSIONの成功率も高い「BLACK + SKY」は学校からの支援も手厚かった。

「…にしても、この町はいい所だなっ」

ユギは歩きながら見回し感嘆する。

澄んだ空に美しい花々。ビル一つ無く、子供達が伸び伸びと過ごせる田舎町だ。

この静かな町にデスセカイの連中がいるとは、どう頭を捻つても想像できない。ありえない、としかユギには考えられなかった。

「考えられるよ。こうゆうとこの方が連中は隠れやすいんでしょ」

「うおおお！？飛朱、オレの心読んだ！？何フツーな顔して返事してくれちゃってんの！？」

「いや、心の声だだ漏れだったから」

気づかぬうちに、ユギは思ったことを声に出していたらしい。

音呼や蝶結の哀れんばかりの視線が突き刺さった。女の厳しい視線ほど痛いものはない。

「もうオレ…いろいろとヤダ」

今日のユギの様子がおかしい事に飛朱は気づいていたが、昨晚の自分のせいだとは分かっていなかった。

少しからかつつもりで言っただけで、あまり興味はないからだ。

「ユギはいつも壊れてるわよ。ほら、もう着いたからしっかりなさ

い」

「はい…」

音呼はユギの頬を抓り、気持ちを引き締めさせる。

目の前には大きく綺麗な屋敷が構えていた。

古くからある宿だが、金色の屋根やつやかな壁の傷みは毎年直すらしく、常に美しい。

その宿に泊まれるとあって、蝶結と裏助に笑顔が咲く。それはそれは満開だ。

「さ、入りましょう」

洒落た門を潜り、ガラガラと横開きの扉を開けた。畳のにおいが一同を包む。

そのにおいと共に、扉の音に気づいた歳老いた女性が出迎えた。

女性は派手な口紅やアイシャドーに、きらびやかなアクセサリをこれぞとばかりに付けている。

もつとほんわかとした人が出てくると予想していた音呼は、顔を引きつらせながら口を動かした。

「あのー…予約していた丁学の者ですが…」

「あーんらっ、貴方達が丁学の生徒さん？アタシがここの女将です。若い子なんて久しぶりで嬉しいーい！さぁお上がり！部屋を案内するわっ」

生徒達は顔を見合わせてから、目で「行こう」と合図をした。

想像を遥かに超えるハイテンションぶりに、一般人よりも耳の良い飛朱とギミアはたじたじだ。

だが今は堪えるしかなく、黙って女将に付いていった。

「さあさこの二つのお部屋が皆様の宿よん！女の子達はこっちで、男の子達はこっちね。あ、予約のお電話を頂いた時に「男共が女子の部屋に忍びこんでいたら、遠慮なくぶん殴ってください。特に風山ユギの監視をよろしくお願いします」と担任の先生がおっしゃられてたから、気をつけなさいねえ坊や達っ」

誰の担任かは聞かなくとも察しがついた。

飛朱とユギの担任、通称・鬼先が予約の電話とお願いをしたのだろっ。

「ナメやがって！あんの鬼先野郎お！」

覗き見なんてしねえよ！と騒ぐユギに、蝶結と裏助は素直に笑う。が、音呼と飛朱は真剣に心配しだした。

「ほんとに大丈夫なのかしら…あたし心配で眠れないわ」

「僕がちゃんと見とくよ。むしろ首輪に繋げとけばいいんじゃない？」

本人達はひそひそと話しているつもりだったが、ユギの耳にはバツチリと伝達された。

「おい。お前ら、オレをなんだと思ってるんだ」

「「変態」」

「あのさ…もう、帰っていいかな」

「ごまかしなど一切なく言われ、怒りよりも悲しみがユギの心を染めた。とことんツイてない日だ。」

そんなユギを見て、厚化粧の女将が盛大に笑う。

「ほんとに若い子は楽しいったらありやしないねえ。こんな子達が最後に来たのはいつだったかしら。それどころか今では良い歳した大人まで来ないよ」

ガハハと笑っていたが、その笑顔に影が落ちたのを飛朱達は見逃さなかった。

化粧では隠せない、深い闇だ。

音呼がその影を探るように、目を光らせた。

「ねえ女将さん。私達のミツシヨンのために、ちょっとお話を聞かせてもらっていいですか？」

「え？ ええジャンジャン質問してちょうだい？ 貴方達以外にお客さんいないし、極秘事でもオーケーよ」

今日は町やデスセカイについての情報収集がメインだ。予定では明日、デスセカイを突撃しミツシヨンクリアを狙う。

「じゃあ男共の部屋で色々聞かせてください。…蝶結、荷物だけ置

きに行きましょう」

「あいあいさ」

女子達は隣室へ重い荷物を置きに行き、男子達も部屋に入った。金色の飾りが所々に施され、窓が大きいのが特徴だ。ベランダから見える景色も絶景である。

「まあお茶でも飲みながらにしましょうよ。美味しいの容れるわよ」

お茶の香が広がるまで、それほど時間はかからなかった。

太陽がキラキラ光る正午頃。

お茶の香りが広がる部屋で、五人の高校生と女将がテーブルを囲むように座っていた。

「それじゃ女将、質問をさせていただきます。まず…」デスセカイを「をご存知ですか？」

音呼の質問に女将は大きく頷いた。

ただの女将にまで存在を知られてるとは、デスセカイの魔の手は予想以上に広がっている証拠だ。

「魔法を使ってお金を盗ったりする、暴走族みたいな人達でしょう？あたしは襲われたことはないけれど…知り合いがやられたわ」

悔しさと悲しさの混じったその顔に、音呼達の心がズキリと痛む。最初からこんな表情をされ、さすがの音呼でも次の質問になかなか進みにくい。それを察したのか、飛朱が音呼の代わりに淡々と問い掛けた。

「デスセカイの本拠地は、知っているか？」

「……ええ」

思い空気をごまかすように、ユギはわざとらしく音をたてお茶をすする。善かれとやった事だが、蝶結に行儀が悪いと叱られた。

しかし結果的には裏助が爽やかに笑ってくれたため、やんわりと雰囲気が緩む。裏助には感謝の一言だ。

その場に溶け込むように、ゆつくりと女将は語りだした。

「この町がデスセカイとかいう集団の本拠地だと知ったのは、一ヶ月くらい前かしらね。それから町の人は一気に余所へ移って行ったよ……そりやもう凄い勢いで。そんなおっかない人達の本拠地だから当たり前だけどさ」

ユギはふと、ここの町を思い出した。

子供の声は無く、風の音が聴こえる静かすぎる町。静かでいいじゃないか、なんて今では思えなくなっていた。

時間の流れが止まったようなこの町は、人のいない孤独な町——まるで死んだような町。

飛朱はみんなが思っているであろう事を、女将に投げかける。

「なんで女将は違う所へ移動しなかったんだ？」

一拍置いてから、女将は真つ赤な唇を動かす。きついアイメイクだが、目は優しく細まっていた。

「この宿はみんなの家だからねえ」

だいたい予想はしていた返答だが、飛朱は違和感を覚えていた。

”守るものにも、被害を受けていない”、と。

ここ、スキマ町に残っている住人はこの女将のみ。デスセカイは何故この宿を襲わない？

女将ひとりくらい、脅迫すればすぐ金が入るだろう。しかも見るからに財産がたっぷりとありそんな裕福な宿主だ。

ただの偶然なのか、確かめる必要があるだろうと飛朱は決意した。そのためにはまず、詳しく話を聞くしかない。

「…デスセカイに被害を受けたことは、一回もない？」

「ないわ。物が無くなったことも、怪しい人に話し掛けられて脅迫されたこともね。旦那はもういないし、女のあたししかないのにビビってんのかしら」

その言葉に素早く、音呼が遠慮がちに突っ込んだ。

「あの、旦那さん…って…」

「ああ、旦那はもう逝っちまった。お人よしすぎる人だったよ」

「そうなの…」

再びの沈黙が一同にのしかかる。

暗い空気が苦手なユギは、何か話すことはないかと考えるが皆無だ。どうでも良い事ばかり次々と浮かんだ。

「えーと…飛朱」

話題が決まらないまま、堪えられなくなったユギが飛朱に話しかけた。考えるより行動派の少年だ。

「何」

「いやあの、な。うん」

「馬鹿なの？頭大丈夫？」

空気の読めない飛朱に、フォローなんて言葉は存在しない。
剣術意外の科目がオール2の頭で、ユギはひたすら考えた。そして、閃く。

「散歩に行こう！」

「……は？」

「下調べ、ってやつだ相方よ」

自信満々に親指を立て、ユギは白い歯を見せ笑う。

飛朱は幼なじみの馬鹿さに頭を抱え、開いた口が閉まらない。女将にはまだ聞かなきゃいけないことがあるのだ。

「猪突猛進は黙っててくれない？」

「そんなこと言わないで、さ、行こうぜみんな！」

飛朱にもユギにもそれぞれの言い分がある。

飛朱は聞ける範囲で女将から情報を得るべきだと考え、ユギはこの暗い雰囲気の中で情報を聞くのは難しく、時間がかかると思っている。

彼ら幼なじみは、昔からなかなか意見が合わない。幼い頃は意見の違いからよく喧嘩に発展していた。

「またコイツらは…、いい加減にしなさい」

音呼は手で髪を整え、保護者のように話に割り込む。

「BLACK+SKY」で同じパーティーを組んだ当初から、音呼は保護者役だ。きつと彼女がいなければ、このパーティーは好き勝手言い放題でまとまりがなかっただろう。だから自然に音呼は、リーダー的存在になっている。

「飛朱の言う通りよアホユギ。いきなりなんなの？——って、いつもなら言ってわね」

「へ？まさかネコちゃん…っ！」

「今回はユギに賛成よ。女将への負担はなるべく小さい方がいいわ。自分達でデスセカイについて調べましよう」

ユギが嬉しそうに飛び上がる傍ら、女将は爪が綺麗な手を横に振る。

「いやお嬢ちゃんっ、あたしゃ平気だから…！」

「いいえ、これはミツシヨン。あたし達がどうにかしなきゃいけないのよ。まわりの人を巻き込むわけにはいかない」

珍しくユギの意見を推進され、飛朱はギミアを抱え諦めたように窓の外を眺める。完全にどうにでもなれモードだ。

蝶結と裏助は文句ひとつ言わず、信頼できる音呼にこれからの時間を任せ、静かに座っている。

それに比べ、ユギは今だにテンションが高く煩い。

「ふははー、今日は俺の勝ちだな飛朱！いつもネコちゃんに味方さ

れると思ったら大間違いだぜ」

「…へえー？音呼に言われてユギはそんな嬉しかったんだー」

「ばっ…！？ち、違うし！！なんでもかんでも音呼の名前を出すな
！」

「お前がな」

「この…」

毒舌悪魔。と言おうとしたが、それはその悪魔の手によって止められる。ユギの鼻と口は呼吸がままならないほど、自分より小さい飛朱の手で塞がられたからだ。

「はひふんはほ（何すんだよ）！」

「黙れ。…あっち見てみてよ」

飛朱が眼で窓の外を示す。そこには三人の人が何やら話していた。黒いキャップを被っていて顔はよく見えないが、体つきからして男だろう。

耳を澄ますが会話は聞こえない。飛朱はさらに集中し、男達に気づかれないよう隠れながら耳を傾ける。

「……話…違…ねえか」

「…んで…こたわる…」

「そんな…んでも良…る」

部分的に聞こえた荒立たしい口調で、男達の空気はあまり良いものではないことが分かった。友人同士の喧嘩というわけでもなさそうだ。

「あいつら…デスセカイの連中か？」

静かになり、口が解放されたユギは小声で飛朱に尋ねた。

女将の顔がひきつる。

「多分。声と口調からして若い男達だし、こんな平日の日に田舎に遊びに来ないだろ。家族とかに会いに来たっていうなら分かるけど、その家族も今は違う場所に移って、この町にいないはず。——音呼、デスセカイの書類貸して」

音呼は素直に紫色のリュックから書類を取り出し、飛朱に投げる。パシリと見事にキャッチした。

ピンでまとめられた書類の束を何枚かめくり、デスセカイの特徴が書かれたページで手が止まる。

「”被害者は皆、黒いキャップを被っていたと証言している。”——決まりだな」

少年核心を得たところで、ちょうど男達がその場を去ろうと移動し始めた。

飛朱は書類を音呼に返し、部屋の扉の方へ歩き出す。

音呼が飛朱を呼んだ。

「どこ行くの飛朱、なんて聞くまでもないか。後をつけるんでしょ？」

「ご名答。どうせ散歩行くんだっただろ？辿りつくのはデスセカイのアジトだろうし、明日探す手間が省ける。ちょうどいい駒が見つかったね」

「…良い機会だから言わせてもらうけど、あんたもユギと大して変わらないわよ。猪突猛进」

「冗談」

音呼が立ち上がると、それを真似するように蝶結と裏助も立つ。ユギもキヨロキヨロとしながら彼女達に続いた。

蝶結はポニーテールを揺らし、くると駒鳥のように廻る。

「かくれんぼと鬼ごっこが混ざったみたいで、なんか楽しそうだねえ！」

メルヘンにも程があるが、彼女の濁りない笑顔はいつでも幸せそうだ。見ている人もつい顔が綻ほころんでしまう。

蝶結と出会って五年、愛想笑いなどの偽の笑いを、飛朱達は一度も見たことがなかった。

「ボクはちよつと怖いよ。でもかくれんぼは好きだなー」

無邪気に話す蝶結と裏助を見る限り、T学強豪チーム「BLACK + SKY」のメンバーだとは誰も思えないだろう。

この二人は中学二年の春から、当時三人しかいなかった飛朱達のパーティーに入った。初期組に比べ、一年遅く「BLACK + SKY」になったが、かれこれ三年目になる。

「じゃ、行こう」

女将はテーブルを乗り出したまま、ポカンと停止していた。心の中では若い子は決断力が良いねえ、と感心するが身体が追いつかない。化粧をして若返りを狙っても、身体は時間に従順に歳をとる。

「じゃあ行ってくるわね女将さん、きっと夜までには戻るわ」

「夜ご飯何か楽しみだね、海ちゃん」

「海は美味しい貝が食べたいですー!」

嵐が去ったように、女将のいる部屋は静寂に包まれる。自分で容れたお茶すると喉から温かさ広まった。
そして一言呟く。

「若い子は波瀾万丈ねー…」

* * *

「ちょ、押すなよ裏助っ」

「ごめんユギ君、でも狭いんだもん」

ミツシヨンのため三人の男達を尾行する、高校生五人組。
尾行相手は悪質組織、デスセカイのメンバーだ。強豪チーム「BLACK+SKY」の名にかけて、ミツシヨンを失敗する事は許されない。

音呼が小声でひそりと話しかけた。

「それにしても、あの三人は何で揉めてんのかしらね」

「さあ。僕はそんなことどうだっていいし」

「…それもそうね」

毅然とした態度の飛朱に、音呼は偉そうな女王のように口角をあげた。まるでデスセカイを嘲笑っているようだ。

蝶結はそんな彼女を見て「音にゃんちゃん、怖い顔してるー」と無邪気に指をさした。

デスセカイは追われてる事などまったく知らず、相変わらず言い争っている。

しばらく歩いたが、その争いは止まることなく続けられた。

「いつまで歩けばいいんだよ…。結構歩いたよなオレ達」

ユギは疲れた様子で汗を拭う。

まだ五月で夏までには時間があるが、だいぶ長い距離を歩いている彼らの額には汗が滲んでいた。

しかし、広い広場のような所に着いた途端、汗がサツと引いた。デスセカイの足が止まったからだ。

「もしや、ば、ばれたか…？」

ユギの声は頼りなく震えた。

もはやこれまでか、と音呼は構える。

「飛朱…って全然動じてねええ！どうすんだよ。オレ達の存在バレてんだろ絶対ー！」

「んー…。なら、正々堂々出てあげればいいんじゃない？」

そう言つて、飛朱は隠れていた木の影から身を現した。

草を踏んだ音にデスセカイはこちらを振り向く。そして化け物でも見たかのように目を大きく見開いた。

この様子から、デスセカイは飛朱達に気がついていなかったのだろつ。とんだ早とちりだった。

「な、なんだお前…っ」

「何者だ！」

混乱する三人組は、飛朱へ口々に叫ぶ。

驚いているのは音呼やユギ達も同じで、行動が早過ぎる仲間に開いた口が塞がらなかった。

ギミアだけが飛朱の動きについて来れ、主の隣で座っている。さすが従順な召喚魔だ。

「礼儀がないんじゃない？何者が尋ねる時は、まず自分から名乗りなよ。…ま、君ら野蛮人には無理な相談だと思うけど」

初っ端から挑発的な少年に、デスセカイも黙ってはいない。

「なんだと糞餓鬼。子供はさっさとお家に帰んな。ママが待つてるぞ？ガハハハッ」

下品な笑い方をする男達に、飛朱はふっと笑みを浮かべた。

「生憎、寮住みなんで誰も待つてないんだよね」

最後まで言い切る前に、飛朱はデスセカイに狙いを定め構えていた。左手の人差し指を突き出し、集中をする。

相手が状況を判断できないうちに、純白で魔法の源「光魔」^{（ひかりま）}が出現し、やがて白い光の中心部が金色へ変わる。

「道理の守護神、光の縄へ」

魔法をだすための詞が紡がれ、光が男二人の身体を縛る。

飛朱の得意魔法、”光魔法”だ。T学で光魔法を使える者はかなり少ない。

「てめえ魔法使えるのか…うっ…」

身動きのとれない彼らは、低いうめき声をあげた。

光魔法の餌食にならず無事だった男は、懷から短剣を取り出す。彼は剣師で専門は短剣なのだろう。

すんなりとやられるほど、デスセカイは甘くない。鋭利な刃先を正面に突き出す。

「その制服…お前らＴ学の生徒か！」

赤目の少年に短剣を向け走ってくる男。

バトルになっちゃったため、ユギ達も参戦した。

男はいきなり四人も増えた敵に驚きながらも、飛朱に切りかかるうと動きを止めない。

冷静に再び魔法を出そうとした飛朱だったが、それは茶髪の少年に阻止される。

「ウォーミングアップしたいし、オレにやらせろー！」

剣を鞘から抜いたユギが飛朱の前に割り込み、男の短剣を狙う。

緊急時以外は命を奪ってはいけないため、心臓に刺して殺さぬよう気を引き締めた。お叱りを受けるのは御免だ。

「オレの剣は何でも切れるぜ…っと！」

ガキーンツと猛烈な音が響いた瞬間、男の短剣の刃が真っ二つに斬れ、誰もいない方向へ吹っ飛んだ。残ったのは短剣を握る部分だけだ。

これだけの破壊をしておきながら、ユギの剣は小さな傷すらなく斬る前と同じ状態だった。

ユギは魔法の才能は無に等しくも、剣の腕は抜群である。

「その短剣ちゃんと手入れしてたか？切れ味最悪だったぞ。剣は大事な相棒なんだから、テキトーに扱うんじゃないやねえよ！剣師失格だ！」

いつもはへらへら生きているユギだが、剣のことになると誰よりも煩い。短剣の主は悔しそうに突っ立っていた。

飛朱は血の気が上がっている幼なじみに、落ち着けと視線を送った。

それに気づいたユギは「悪い」と謝罪し、音呼に声をかける。

「ネコちゃん。後はよろしく」

「わかってるわよ。彼等には勿体ないけど、あたしの音色で眠らせてあげるわ」

光魔に包まれたフルートを口元へ運び、音呼はそつと息をはいた。彼女が自分に敵意がない限りその音は凶器にならないため、飛朱やユギ達には綺麗な音にしか聴こえない。

しかし技の対象であるデスセカイは、たちまち意識がもうろうとし、最終的には眠ってしまふ。

そんな憐れな男達を、蝶結と裏助は慣れた手つきで縄でグルグルに縛りつけた。なぜこんなにも長い縄を持っていたのかは謎だ。

「さあてと、顔でも拝見しますかー。どんなアホ面なんだろうな」

にやにやしたユギがデスセカイ達の深く被られたキャップを取る。そのうちの二人の顔に音呼は残念そうな顔をするが、意外にも残りの一人は整った顔立ちをしている。短剣をユギに折られた男だ。

「あれ…、なんかこいつイケメンじゃね…？オレほどじゃあないけどな！」

「寝言は寝て言えですうつ」

「海ちゃんんん！？いつからそんな毒吐くようになったの！？飛朱の真似しちや駄目だよ！？」

微笑む蝶結にユギの涙腺は崩壊する。音呼と裏助はそれを見てケラケラと笑った。が、一人の少年は口角すら上がっていない。それ以前にユギを見ておらず、視線は短剣の音に釘付けになっている。

「…っ！」

飛朱が突然何かで刺されたかのように苦しみだし、倒れるようにしゃがみ込んだ。心臓あたりの服をギュッと握りしめ、呼吸がままならない。

「…飛朱…っ！？」

いち早く気づいたユギが、目を擦っていた手を少年の肩に置き様子を伺う。

「また”アレ”か？」

「ん…」

荒い息を少しずつ整える飛朱の背中を、蝶結が優しくさすった。裏助は得意の回復魔法の詞を紡ぐ。

「今一度静かな天使の囁きを」

この魔法は呼吸を整える事を目的としたもので、飛朱に落ち着きが戻った。呼吸も通常通りの速さで繰り返される。

「はあ…、感謝するよ裏助」

「いえいえ。もう大丈夫？」

「なんとかね。まさかこんなところで、”記憶連鎖”が起こると思っ
てなかった」

記憶連鎖。

それは飛朱が四年前から背負っている発作のようなものだ。

未夢の意識を持つ飛朱は、未夢の記憶まで心が覚えている。しかしその記憶は簡単に思い出せるものではなく、思い出すための鍵が必要だ。つまり、未夢が見た物や人を見なければ、飛朱は未夢の過去という扉を開けることができない。

だが記憶連鎖さえすれば、映像や音、その時の未夢の気持ちや走馬灯のように解るのだ。高速再生という言葉が相応しいだろう。

「いったい何が記憶連鎖させたの？」

音呼があたりをキョロキョロを見回す。

木々の緑のカーテンがあるだけで、他は何もない。

「物じゃなくて、人に記憶連鎖したみたいだよ。その剣が折られた男、デスセカイにね」

「この人に？未夢となんの接触があつたっていうのよ？記憶連鎖でちゃんと分かつたんでしょね？」

「勿論。——六年前、未夢が十歳で小学四年生だった頃だ。未夢と男が出会ったのはT学で、男はT学の中学三年生だった。僕達とは五歳差だな」

「あの男T学の生徒だったの！？悪に染まるとは…T学生失格ね。だいたいそんな人間がよく中学三年までT学でやってこれたわ。悪に惑わされるような心の弱い人に、そんな力があるとは思えない」

音呼はガムを吐き捨てるように言い放ち、イライラしているのが丸解りだ。

確かにユギに瞬殺されているところを見ると、あまり力はない。このくらいのレベルなら、中学を上がる時に退学しているはずだ。

飛朱は話を続ける。

「けど、当時の男は強かった。学年の中でも上の下くらいだ。そんな時、T学の噴水でその男と未夢は偶然会った。男はそこで短剣の練習をしていて、未夢も同じく練習をしに来たから」

——『お兄さん、剣師なんですね。とてもフォームが綺麗で凄いなあ』

T学の鐘が鳴り、休み時間が始まったある日。
クルクルとした銀の髪をして、初等部の制服を着た少女が男に話しかけた。

人懐っこい性格をした彼女は、緊張することなく年上の男の隣に

座る。

Ｔ学の噴水周辺には二人も座っているベンチが何個もあり、休憩している生徒も少なくない。生徒全員の憩い場だ。

『…？君は？』

まったく知らない小学生に話しかけられ、戸惑い気味の男。
少女はえへへ、と笑った。

『突然ごめんなさい。私は初等部四年の”花葉^{かよう} 未夢”です。お兄さんの剣に見とれちゃってつい…』

少女の赤い瞳は、男の灰色の眼を見ながら謝る。宝石のような赤い眼は、男の視線を掴んで離さない。まるでルビーだと彼は思った。

未夢が瞬きをした時に我に返った男は、慌てて自己紹介をする。

『俺は中等部三年の”羽崎^{はなは} 尖斗^{せんし}”だ。専門は短剣。…でも、未夢ちゃんが思ってるほど俺は強くない』

紺色の髪を弄ってから、尖斗は短剣を触る。刃は光っていてきちんと手入れがされている様だ。

それに対して未夢はぶんぶん頭を横に振る。爽やかなシャンプーの香があたりに広まった。

『お兄さんは強いよ！剣師の先生が、剣師はフォームが基であり一番重要だと言ってたから！』

力強く否定する未夢に、尖斗は素直に「ありがとう」と言った。褒められたのはいづりか解らない。たとえ小さな少女だろうと、

そう言ってくれるのは純粹に嬉しかった。

尖斗と両親は今の成績が一つでも下がったら学校を辞めるという約束をしている。

親からすれば大手の会社に入って貰うため、魔法ではなく一流の学校で勉強をしてほしいからだ。

親の小言を思い出し溜息を吐く尖斗に、突然未夢は両手を合わせた。

『でね、あのー…お兄さん。お願いがあるんです。私の魔法の相手をしてくださいねか?』

真剣な表情で頼む未夢。まるで仏を拝むようだ。

尖斗はうつすら微笑し、未夢の小さい頭を撫でた。ふわふわとした髪に、小動物を触っているような感覚になる。

『いいよ。相手になってやる』

『ほんと!?ありがとうございます!ではさっそくやりますっ』

子供独特の笑顔をし、少し経ってから集中モードに入る。先ほどの少女とはまるで違い、どこか大人びていた。

妹とキャッチボールをするようなノリで尖斗は剣を構える。

——しかし、キャッチボールの割にはあまりに強すぎるボールが飛んでくるのを、尖斗はまだ知らない。

『星のカケラ今流れよ』…！』

尖斗は目を疑った。学園で一握りの者しかできない魔法——光魔法を少女はやっているのだ。尖斗は出来た試しがない。

彼が固まっている間に、少女の左手の上当たりにビーダマほどの大きさをした球形の光が現れる。

そして、勢いよく尖斗へ飛んだ。

『っ…っ』

ガギツと音がし、光の球は消えて無くなった。短剣を持った手は衝撃で痺れている。咄嗟に本気で動いたから良いものの、手加減をしていたら確実に怪我をしていた。

——何者なんだ。

そう思わずにはいられない。

そんな時チャイムが響いた。休み時間終了の知らせだ。

『あ、クラス戻らなきゃ！お兄さん、どうもありがとう。できたらまたお願いします』

——…花葉 未夢。

彼女は可愛い小学生。

彼女は動物が大好きな女の子。

彼女は学年一の……”天才魔術師”。

尖斗がその真実を友人から聞いたのは、それから三日後だった。

* * *

- c o n t i n u e -

* * *

「——というわけだ」

記憶連鎖により得た情報をパーティー達に話し、疲れた様子の飛朱。

尖斗が天才魔術師・未夢と関わりがあつた事実、一同は驚きを隠せない。

ユギは男達を一瞥し、息を吐いた。

「んで、コイツらどうする？連れて帰るのか？」

「黒幕のボスに報告されても困るし、連れて帰るしかないわよ。女将には悪いけど、旅館に隔離しましょう。」

音呼はそう言うと、蝶結の肩を叩いた。何を言っただけでもないが、蝶結はニコやかに頷く。

そしてポニーテールを束ねているリボンに触れながら、少女はある召喚魔の名前を呼んだ。

「おいで”リイキ”！」

蝶結がそう言うとマジックのようにポンツと、サーモンピンク色のツインテールをした少女が現れた。身長は百六十五センチほどで普通の少女にしか見えないが、耳が尖んがっている。

「お呼びいただき嬉しいです蝶結様っ！今回はどのようなご用件でしょうか？力仕事なら何でもお任せあれ」

「うん。あのねリィキ、旅館までこの男の人達を運んでほしいの」

「承知致しましたーっ」

蝶結の得意魔法は召喚魔法で、リィキは蝶結の召喚魔だ。主である蝶結は召喚魔に指示をすることが出来る。

君主に仕えることが召喚魔の望みであり生き甲斐なので主からの命令を反することはないが、そのためには契約をする必要がある。

契約は「召喚魔が自分の意思で、主となる者に一番大切な物を主預けること」で交わされ、それが出来て初めて主従関係が成立する。

リィキの大切な物は蝶結の髪を束ねているリボンだ。元は鉢巻きなのだが、蝶結はリボンとして身につけている。

「あれ、蝶結様？あのネコさんみたいな召喚魔はどなた様のですか？」

リィキが見つめる先にはギミアが座っていた。

「ああ、あの子はギミアちゃんって名前で、飛朱ぼんの召喚魔だよ。でも二人は契約をしてないみたい」

「ふむ…放し飼ってやつですか、いまだき珍しいです。飛朱ぼん様は、やはり面白いというか謎な方ですねえ」

「…あのさあ、いい加減その呼び方やめて欲しいんだけど。それに僕は好きでギミアを放し飼いにしてるんじゃないよ」

ギミアは飛朱の召喚魔だが契約は交わされていなかった。そのためギミアは、事実上は飛朱の召喚魔だが契約は成り立っていないので、命令を無視することも可能だ。結果、飛朱が「戻れ」と言っても戻らず、いつまでも召喚されたままになっている。

「召喚魔がいるだけいいじゃねーかよ」

ユギは羨ましそうにギミアを撫でる。

魔法がまるで使えないユギにとって、召喚魔は夢のまた夢。

その姿を見て、飛朱は得意の悪魔面でほくそ笑んだ。

「ユギは馬鹿で哀れだよ。遠距離技すら出来ないし、…カワイソ」

飛朱はさぞ楽しそうに言い放った。ユギの心にグサリと矢が突き刺さる。

——このドSが…っ。昔はもっと素直で可愛い奴だったのに、どうして神様はコイツをこんなにしたんだか。

昔の飛朱を思い出し、自分の額に指を当てながらやれやれと呟くユギ。裏助の好物であるチョコレートのような茶色の瞳は、寂しそうに伏せた。

「オレのガラスのハート、お前のせいでブチ壊れちゃったわ。ちょっとは優しさというものを学べよな、オレみたいな男になるために！」

「ユギのハートなんて百円のボンドでくつつくよ。…だいたい、君は優しさを超えて馬鹿だよ、自覚ある？詐欺られるよって前から言

「ってんじゃん」

「詐欺詐欺って…、オレそんな騙されやすすくないからな！」

むきやーと猿のように怒りだすユギを音呼は横目に見て、彼の膝辺りを蹴り飛ばした。膝カックンと同じ要領で、綺麗にユギが倒れる。

「ガダカダ言っていないで旅館に帰るわよ！じゃあリイキ、運ぶのお願いね」

「はい！あ、お疲れでしたら音呼様もお担ぎしましょうか？」

「いや…それは遠慮しとくわ」

リイキは細い腕で、軽々と大の大人を担ぐ。彼女はとにかく力が強く、戦闘にも向いている。

力を発揮するリイキの光景は今までに何度も見てきたが、ユギはまだ納得がいかず声をかけた。

「オレも手伝おうか？絶対重いでしょ」

心配そうなユギの顔に、リイキはへへつと笑った。

「このくらい大丈夫ですよユギっち様。リイキはユギっち様を余裕で折れるくらいの力がありますから。…ハッ！それともあれですか？新手のナンパですか？キャッ」

気をつかったただけ無駄だった、とユギは心から後悔した。

——そうだ、こいつは飛朱も苦手な清々しいくらいウザイ奴だったんじゃない。

思い出すのが少し遅かった。

リイキは可愛い容姿をしているが、蝶結と性格は真逆でかなりうるさい。それが彼女の長所であり短所だ。

「今日もみんな元気だねー」

ギミアの隣にしゃがんだ裏助が幸せそうに微笑んだ。

* * *

「……女将、先に謝るわ。悪党連れて帰ってきちゃったから、隔離する部屋を用意してほしいの。料金は後日学校から払わせるから」

帰って早々、玄関で気まずそうに謝る音呼。

帰ってきた客が増えていて、女将は「おやまあ」と言って口をポカンと開けた。視線をズラすと、か弱そうな少女が男達を担いでいる姿がありまた驚く。ツツこまないでくれ、とだけユギが伝えた。

「世の中には凄いお嬢ちゃんがいるもんだねえ。あ、部屋なら好きなだけ使っていいよ。料金も特別タダにしてあげる」

「ほんとですか？それは有り難いわ。じゃあ飛朱達の部屋の隣を借りるわね」

女将は紅く燃えるような唇の端を上げる。しかしその笑顔は、リ

イキに担がれうなだれている男の顔を見ると、一瞬にして元に戻った。

一人の男をじっと眺め、わけが解らないような表情を浮かべる女将。

そして小さく声を発した。

「…もしかして尖、斗くん？」

思ってもいない言葉に、しんと空気が静まる。男に意識はなく反応もないと思われたが、ちょうど彼だけが目を覚ました。尖斗は魔法の免疫のようなものが強く、他のゼスセカイより目ざめるのが早いのだろう。過去のことだが、T学で成績の良かった生徒だけはある。

リイキが尖斗を降ろすと、彼は女将を発見し眼を何倍にも大きくした。

「女将、さん…？つか、な、なんで俺旅館にいるんだよ…っ！」

混乱する尖斗をうざったそうに睨む飛朱は、腕を組んで壁に寄り掛かった。

音呼は尖斗の腕を掴み、紫苑色の鋭敏な瞳で青年の顔を覗きこむ。

「君はさっきのT学の…」

「T学高等部一年、「BLACK+SKY」の野原音呼よ。貴方のことはもう知っているから自己紹介はいらないわ。さて、聞きたい事は腐るほどあるのだけど、まず最初に…あんた、女将と知り合いなの？」

大きな目に凝視され、尖斗は視線を逸らすことが出来ない。ここで嘘をついてもすぐに見透かされそうだ。

「知り合いなんてそんな軽いもんじゃない。女将さん達は… 恩人なんだ」

「達って他にもいるの？ 恩人って何のことよ」

問い詰める音呼の質問に答えたのは女将だった。

「きつと旦那のことでしょう。四年くらい前かしら？ 雨の中傘もささずに佇んでいる尖斗君を旦那が見つけたよ。で、行く宛てのなかった尖斗君をしばらく泊まらせていたんだよ」

「うひょー！ いいな、オレもしばらく泊まりてえ」

話を遮ったユギに、音呼の蹴りが再び飛んだ。鬼も縮こまりそうな音呼の形相に、少年は肩を震わせた。

「蝶結、バカユギがバカしないように見張ってて！ 何言い出すかわかんないのよバカだから」

「バカってそんなに言うなああ！ 本当にバカになっちゃうだろっ」

「これ以上バカになれないわよバカすぎて！」

小学生のような喧嘩を始める男女。

しかし飛朱が何かをそれぞれに耳打ちすると、二人はバツの悪そうな顔で私語を慎んだ。

何を言われたかは本人しか知らない秘密だ。

「その間、尖斗君は旅館で仕事の手伝いをしてくれたわ。でもある日、手紙だけ残して突然彼はいなくなってしまった。やっぱ若い子はつまらないわよね、こんな田舎の旅館なんて…」

「違うっ！」

だんまりだった尖斗が、何かに反応したように心の底から叫声を上げた。人間より何かと敏感な召喚魔は、空気の振動を感じる。

「違うんだ女将さん。つまらなくて逃げたわけでもなければ、嫌で消えたわけでもないんです。俺は、俺は…」

もやもやとした鬱陶しい雲が晴れたように、尖斗ははつきりと女将の眼を見た。

デスセカイとしての暗いオーラはどこへ消えたのか。今の彼はどこにでもいそうな、ただの青年そのもの。

「女将さん達に迷惑をかけなくなかった。だから出て行っただけです」

T学の生徒達は首を突っ込むのを自重し流れに任せた。ユギも珍しく無言で黙る。

「迷惑だなんてとんでもないよ！あたしらは凄く嬉しかった。なんでそう思っただんだい」

「女将さん達は気づいていなかったかもしれないけど、ある客が話してるのを聞いたんだ。「なんだあのチャラチャラした子供は。あんなのがいると旅館が霞んでしまう」って。だから、ああ俺は邪魔なんだ、って気づいた」

相槌をうつっていた女将から、途端に黒い涙が流れた。大量のマスカラが混じっているから、黒に変色しているのだろう。

水玉のハンカチをそつと、裏助が差し出した。

「それから親に行けと言われた学校にも行かず、遊びまくる毎日。最近まで一日中触っていた剣も物置に閉まって、見る事すらなくなつた」

尖斗には守る物も、目標も、生きる意味も無かった。とりあえず生きる。それだけだ。

バイトで稼いだ金は全て遊ぶため、生きていくための物ではない。いつ死んだって悔いるものがないから、どうでも良かった。

「そんな生活を続けて数年たった日、つるんでいた奴からデスセカイのメンバーにならないか、と誘われた。遊ぶ金がすぐ手に入ると言うから即オーケーをだしたんです。けど、薄々感づいてはいたけど、デスセカイは悪集団だった。でもまさか…旅館のあるスキマ町が本拠地だとは思わなくて…」

長つたらしい羅列に、めんどくさがりやの飛朱が深くため息を吐いた。飽きて眠たくなったような猫に似ている。

そんな飼い主をギミアは気遣うように寄り添った。もはやどちらが猫だかわからない。

「はあ、僕長い文聞くの苦手なんだよね。短縮してほしいんだけど」

「ユギといい飛朱といい、なんでこのバカコンビは人の話を黙って聞いてられないのかしらねえ…！」

「でも音呼、時は金なりって言うし。そしてユギなんかといっしょにしないで」

「知らないわよっ。これはミッションなのよミッション！」

「そんなこと知ってるよ。あ、羽崎尖斗さん、もう箇条書で言ってくれませんか？僕そろそろ眠……疲れたから」

「無駄に言い直したわね今。…ったく」

尖斗は不愉快というよりも、なんだコイツらという顔で突っ立っていた。

女将の涙も引っ込んで、シリアスムードの粒さえ残ってない。

「なんかもう馬鹿らしくなってきた。赤目の坊ちゃんの望み通り早くするよ」

尖斗が仕切り直したが、先程とは違い緊張感がなくなった。それが吉と出たのか、空気が緩くなる。例えるとクラス会議のような雰囲気だ。

「じゃあ続けます。——ここが本拠地だと分かったオレは、この旅館だけは襲わないでくれと上に頼んだ。でもここは裕福で金が沢山取れると言って、上は頭を縦に振らなかった。けどしつこく言ったら交換条件で認めてくれたよ」

「交換条件ってどんなよ？」

「旅館は襲撃しないかわりに、メンバーに魔法を教えろって命令さ

れたんだ。自慢じゃないけど、他の奴よりは魔法が出来る方だったから……」

「その割には弱いよね」

サラリと毒を呷く飛朱だが、尖斗は怒気せずフツと笑った。

「そうだね。魔法の源である心が揺れてばっかで不安定だし、剣と意思の疎通ができてなからかな。前はもっと楽しかったのに……」

「そうだお前っ、剣は大事にしるよな！あと折って悪かった！」

自分でやっときながら、ユギは詫びた。彼の素直にひたむきな性格に、尖斗は羨ましさを感じる。

「俺も君みたいな人になりたいよ」

「……じゃあ、なる？ユギのどこが良いのかは分からないけど」

飛朱は可愛く真っ黒な笑顔を浮かべた——…。

「それは、どういうことだ？」

にやつく小悪魔に尖斗が問う。飛朱がこの笑みを浮かべている時は、かなりの確率でろくな事を起こさない。

それを知っている音呼は眉間をひそめた。いかにも嫌そうな顔だ。

「待ちなさい飛朱、面倒事はごめんよ？あんた何考えてんの。だいたいこの男がユギになっちゃったら手間がかかるだけじゃない」

「ちゃっかりオレの事けなしたよね、ネコちゃん」

「うるさいわね少しくらい黙ってなさいよ。そんなことも出来ないなんて人間として終わりね。いいこと？待て、よ！」

「オレは犬じゃねえ、ちゃんとした人間だ！人、間！」

本格的な喧嘩になる前に、慣れたように裏助が止めに入る、結果、二人は火花を散らしたまま休戦となった。

尖斗は年下の少年等を苦笑いで見つめ、飛朱は馬鹿にしたように息を吐く。

二人とも素直でないのは学校でも有名だが、ケンカップルもどきの関係をいつまで続けるのだろうか、とひそかに裏助は思っていた。飛朱や裏助だけでなく、彼らがお互い好意を寄せている事は皆お見通しだ。

鈍感天然にこにこ少女、海蝶結うみりぼんを除いては。

「まったく。喧嘩はいけないよ。」お友達”なんだから仲良くし

ようね？…あ、あとリイキ、その男の人達部屋に運んで絶対に逃げられないようにしといてー」

蝶結が子供へ怒るように同い年へ注意すると、なんとなく恥ずかしくなったユギと音呼は静かになる。

もんもんと漂う桃色の病に、尖斗は気まずくなり飛朱に話の続きを頼んだ。青春に堪えられないほど、俺は大人になってしまったのか、と感じながら。

「ん、じゃあ邪魔が入ったけど続けるよ。確かにユギみたいなのがもう一人増えると思うと死にたくなるけど…。考えてみてよ？もしこの男の立場がユギだったらってね」

「別に死にたくなるまでは言っていないけど。まあそんなことより、そうねー…ユギならきつと…」

間を挟んで音呼はハツとし、飛朱を見た。紫苑の瞳と赤い瞳がバチリと合い、赤紫の糸で心が繋がる。

まるで探偵が犯人が誰なのか公表するのを勿体振っているように、彼女等もなかなか言葉にしない。

しびれを切らした尖斗が弁明してくれと手を上げ、やっと言う気になった飛朱が断言した。

「ユギならきつと自分の過ちを悔い改め、悪ーい悪党デスセカイを倒すのに協力してくれるよねえ」

——つまり「働け」。

圧縮してしまうなら、その二文字が相応しいだろう。

* * *

うさぎの见えない月が夜を照らす中、田舎にある旅館は遅めの夕食を迎えていた。新鮮な魚介類や野菜に若者達は歓喜の声を上げる。蝶結の好物である貝も並び、少女はとろけるような顔で頬張った。

先程まで尖斗はデスセカイのアジトなどの情報を聞き出されていたが、すっかりこの場に馴染んでいる。完全に放し飼い状態だ。

確かに彼はもう飛朱達に危害を加えるつもりはないが、いくらなんでも少し無用心だろう。

しかし尖斗はすぐに理解した。

——俺はもう武器もない。

——それにあつたところで、彼らにはきつと勝てないだろう。

遠回しだか確実に「働け」と言われたため、彼は素直に従うことにした。

何をすれば良いのかぼーっと考えながら、食べ物や口を運び、数回噛むと懐かしい味が広がる。自然に頬が緩んだ。

「女将さんの料理は、昔と変わらず美味しいな。欲を言えば旦那さんともいっしょに食事をしたかったです」

「尖斗君……」

「なんで、逝っちゃったんでしょうか。まだきちんと謝れてないのに」

女将の旦那であり、尖斗を見つけ助けてくれた恩人はもういない。

風の知らせで、彼の死を前から知っていた尖斗だが、やるせなさに改めて心を落とす。

女将は飾ってある夫の写真を見ながら、険しい表情の尖斗に話しかけた。

「旦那はね、死ぬ間際まであんたを心配してたよ。自分は呼吸するのすら苦しいっていうのにね。そしてある日、私に言ったの。「みんなの”居場所”になれるよう、尖斗君の家になれるよう、俺が死んでも旅館を続けてくれ」って」

彼の願いを叶える事が、女将の生きる意味であり根幹。夫婦の強い絆は一層素晴らしい場所を創り上げた。

旦那はずっと、待っていた。

旦那はずっと、忘れなかった。

貴方という、大事な存在かぞくを。

そう女将が伝えると、尖斗は唇を噛んだ。噛みちぎってしまうのではないかというくらい、きつく、強く。

けれど尖斗は己に対し、爆発しそうな勢いで頭にきていた。じわりと鉄の味がしても他人事のように放置する。

——ごめん、なさい。旦那…。

悲嘆な雰囲気の中、初めて青年は恩人が死んだ事に涙を流した。今までは心を凍らせ知らないふりを貫いてきたが、冷えきった心は滝のように溶けていく。

——ずっと待たせて、ごめんなさい。

——見送れなくて、ごめんなさい。

——待っていてくれて、ありがとう。

「はあゝ…良い話だ…！」

ユギのこのひとことから、雰囲気はぶち壊れた。

少年は大袈裟に鼻をすすり、わざとらしく目を擦った。泣いてこそいなくても本気で感動したようだ。

音呼も柄にもなく寂しい気持ちに襲われるが表には出さず、ごまかすためにユギに喝を入れた。

私は全然感動なんかしてないんだから。とでもいいかげな目つきでフンッとそっぽを向く。

「いい年した青年がうじうじ泣いてんじゃないわよ。ご飯がまずくなるでしょ？ユギもガキじゃあるまいし。ったく、どいつもこいつも！」

「…音呼、ごまかしてるつもりなのかなあ。ね、ギミア」

「ミウ！」

「飛朱、聞こえてるわよ。ギミアに変なこと吹き込まないでくれるかしら」

「さ、食べたなら明日に備えて寝ないと。ね、ギミア」

「無視すんなアア！」

高校生のノリは、どんな暗い雰囲気も飲み込む威力を持っている。学生の一種の強みだろう。

尖斗はボカンと人形のように固まっていたが、したたる涙を手の甲で消した。それから自然に穏やかな笑みが零れる。

鼻息を荒くしながら、突然女将は立ち上がり、ピースをする。しかもご丁寧に裏ピース。

ギャルがプリクラを撮るときのポーズみたいで、音呼が思わず吹いた。

「まだまだ料理は沢山あるわよー！出血大サービスだから動けなくなるまで食い尽くしてしまいなさいっ」

「よっしゃ！さすが女将太っ腹だぜ……って、海ちゃん？貝以外も食べなさい？」

「ユギっちはちゃんと野菜も食べなさいねー」

満面の笑みで、蝶結が少年の痛いところをつく。ユギは太い矢に刺されたように腹を押さえた。

「…っつ、申し訳ございませんでした」

「ユギ、そんな薄っぺらい謝罪で済まないよ、償わなくちゃ。なんなら僕が手伝ってあげる」

昔から彼が野菜嫌いを知りつつ、ピーマンを箸で挟んだ飛朱が、それをユギの口へ突っ込んだ。真っ青になり唸り声のようなもの発するユギを見て、全員ケラケラと肩を上下させる。

たわいなくても、常に話し声がして女将や尖斗にとっては久しぶりの、偽りない幸せの時間だった。しかしそれは居心地が良いからこそ、早送りしたように時間が短く感じてしまう。

——時間って、こんなに早く過ぎていくものだったのか。

一定のリズムで針を動かす腕時計を見て、尖斗はつくづくそう感じた。

* * *

「あー腹破裂しそー」

食事を終え胃袋が満たんになり、一同は部屋に戻るため廊下を歩いていた。スリッパが床と擦れ、しゃかしゃかと音が鳴る。その音の中でも、特に大きく急いでいるような足音が、腹部を摩るユギの元へ近づいた。

「…ユギ君、ちょっと聞きたいんだけどいいかな？」

「へ、俺に？別にいいすよ。でもオレ腹痛いんで手短に！」

つい食べ過ぎてしまった過去の自分を恨みながら、ユギは迷うことなく承諾した。

飛朱が後ろで聞き耳を立てているとも知らず、尖斗は咳ばらいをひとつする。

「じゃあ単刀直入に聞いちゃうけど、君にとって剣って…何？」

「相棒」

質問も早ければ、答えも早かった。まるで音速のように返ってきた返事に、尖斗は声を失う。

当の本人は得意な微笑みで相棒を見つめ、「な！」と物言わぬ剣に同意を求めた。

後ろでは飛朱の形良い唇が、楽しそうに歪む。

——剣オタクって、みんなこんな単細胞なのかな。

赤い瞳は幼なじみを捉えながら、飛朱はのんびりとそんなことを思っていた。

尖斗はユギと彼の腰にある剣を交互に眺めてから目を伏せた。
オーラがひどく純粹に輝いていて、じっと見るには眩しすぎたから。

「オレは絶対、剣こいつといっしょに親父を超す。あんなクソ親父なんかに負けたくない。一流の剣師になるんだ」

「ということは、君の親父さんは剣師なのかい？」

「ああ、かなり強い剣師なんだよ。小さい頃から親父の剣を見て育ったんだ。いつもはヤクザみたいに柄悪い父親だけど、剣持ってる親父は世界一かつこよかった。だからオレも、やりたいと思うと同時に抜かしたいという夢が生まれた」

なんだかんだで、父親を尊敬している口ぶりの少年。尖斗はそれが死ぬほど羨ましかった。彼が親を思い出しても、剣への罵声と幻

滅したように自分を見捨てた顔しか浮かばないからだ。

「夢…か。懐かしい単語だ」

「それにしても尖斗さん、そんな質問するなんてどうしたんだ？」

「いや、「ユギになりなよ」って言われているから研究のため。それに」

” もう一度、やり直したくなった。”

彼の意味深な言葉に、ユギは首をひねった。飛朱も興味深そうに動作を止める。

「俺も君みたいにしてた時期があったのに、今じゃ剣へ対して執着がない。でも君達を見てて思った。またあの短剣と生きたいって。でももう…無理だよな…」

尖斗の短剣は折られて袋でまとめられ、今は部屋に置かれている。剣から一歩たりとも離れたくないユギにとっては、考えられないことだ。

風呂の時すら離れ難く、せめてすぐ近くの脱衣所に置いているくらい少年なのだから。

「…剣を大切にすると、コイツも一段と光ってくれるんだ。逆に手入れをサボった日には切れないし、刃はガタガタ。あん時は参ったなあ」

「ユギ君にもそんな事が？」

「あつた。そんな時オレは親父に勝てないって諦めて、剣を持つ意味が消失しちゃったんだよ」

「君に限って考えられないな…。命くらい剣を大切にしてくれよ」
「捻くれたい年頃だったんすよ。でも今はかけがえのない、身体の一部だと感じてる。だから道を間違えてしまった尖斗さんも…絶対やり直せる」

ユギのまつすぐな瞳に偽りはない。

尖斗は眉を下げ、美々しい短剣をのびのびと振っていた少年時代を思い出した。

握った感触、したたる汗、弾んだ心。

全てが今と違う世界。大好きだったあの世界。
上達する度、泣きたいくらい喜びが沸き上がった青春。

「やり直すチャンスはこれが最後かもよ？」

ひょっこり顔を出した飛朱が、追い撃ちをかけるように声をかける。

ユギは驚き剣を握んでいた手を緩め、キツと盗み聞きしていた少年を睨んだ。

「びつくりさせんなよ！お前気配なさすぎ！」

「はあ？ユギが鈍感なだけでしょ」

「んのやろーっ」

普段通りの口喧嘩を始める高校生。

しかし尖斗にはそんな光景眼中になく、決意したように歯を食いしばった。

「俺は…」

——どうしたいんだろう。

——いや、本当は解っている。

人が変わったように彼の表情は堂々として、確かな”意”を持っていた。

その様子を見てユギはクエスチョンマークを連ねていたが、飛朱はその鋭い勘で察したようだ。

そして青年は力強く誓った。

「デスセカイを滅ぼし、二度と誰も傷つけたくない。俺は生まれ変わる」

明日を生きるために。

あの日々を取り戻すために。

——旦那さん、俺は前に進みます。

* * *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6535v/>

鎖で繋がる記憶

2011年12月17日12時50分発行